

# 親鸞教學

歴史の力 —入出二門の源泉—	安田理深 1
親鸞における学の特質	寺川俊昭 14
称名破満	臼井元成 29
普く諸の衆生と共に —愚禿釈親鸞の名告りの意義—	延塚知道 41
.....	
信心仏性説をめぐる一考察	石田慶和 53
.....	
第二十願の内景	曾我量深 67
真言と解釈(4)	金子大榮 81

33

大谷大学真宗学会

宗義は宗祖の建立に係り、宗學は末學の討究に成る。……………

宗學なるものは、此の宗義を學問的に討究して、説明解釋を與へんとするものにして、其の説明解釋は如何に變遷するも、宗義は毫も其の影響を受けず。超然として其の一定不易の性質を保つことを得るなり。故に宗學の境界に於いては討究上充分の自由を與へ、決して束縛を加ふべきものに非ざるなり。

（『教界時言』）

と会通。これが一宗に冠たる教学の内実であった。そしてここに教学は、宗祖親鸞の精神から随分分離してしまった。だがこの封建的体質は、いまだに澱のように、我々宗門人の体内に残っているのである。それは、具体的には、「精神主義」運動への無理解となつて端的に現われている。すでに周知のように、去る十一月六日、東本願寺住職大谷光暢師は、東本願寺を真宗大谷派から離脱させる旨の「声明」を発表し、同日、「被包括関係廃止の公告」を掲示された。四四年の「開申」に端を發した教団の危機は、この先どのような深刻な事態を迎えるか、まったく予断を許さない。ただここで看過できないのは、「声明」のなかで、清沢満之に対して言われのない非難を浴びせておられることである。自己保身のための言いがかりとはいへ、法主と畏敬されてきたお方が、このような言質に及ぶとは、誠に悲しいことである。ついにここまで来たかという感慨を禁じ得ない。この非難の裏には無知と偏見がある。だがこの発言を生み出した遠因は、封建時代から培われた宗門の土壌である。この土壌に浄水を注がぬ限り、「声明」の中傷を真に克服することはできないのである。

さて今号は、龍谷大学教授として宗教学を専攻しておられる石田慶和先生に「信心仏性説をめぐる一考察」と題する示唆深い論文を御寄稿頂いた。先生は、御専門の立場から親鸞教学に取り組んでおられ、これまで『信楽の論理』『親鸞の思想』（法蔵館刊）などの著書を通じて、様々な問題を提起しておられる。御多忙中にもかかわらず『親鸞教学』のためにと御執筆をお引き受けいただいた。ここに厚く御礼申し上げたい。

安田理深先生の御講義は、慈光会主催の『入出二門偈』の会における講義を筆録したものである。正浄寺御住職の森智誠先生には毎号お世話になっている。ここにあらためて深い感謝の意を表したい。

学内では、寺川俊昭先生、白井元成先生、延塚知道特研員が論文を寄稿された。また曾我量深先生と金子大栄先生の大学院における御講義を掲載した。両先生の講義は、テープを筆録したものであるが、これからもテープの在庫がある限り誌上に公開してゆきたい。

教団が危機を迎えているとき、本当に大切なことが見失われる危険がある。静かな聞思を今こそ徹底したい。(安富)

昭和53年12月1日 印刷 昭和53年12月10日 発行	親鸞教学 第33号 至 650
編集 発行	京都市北区小山上総町22 大谷大学真宗学会 親鸞教学編集部 発行人 寺川俊昭 大谷大学真宗学研究室 振替 京都 8225番
発売	京都市中京区寺町通三条上ル 文栄堂書店 振替 京都 2948番
印刷	京都市下京区七条御所ノ内中町50 中村印刷株式会社 電話 (313) - 0468番

親鸞  
教 学

第 三 三 号

昭 和 五 十 三 年 十 二 月 十 日 発 行

大 谷 大 学 真 宗 学 会